

20230914 「タネの話」

日本の農業の状況は、実に危ういです。これまで紹介してきたように、肥料、農薬は海外からの輸入に頼っているのが現状です。これに農業従事者の高齢化、そして農業機械等の燃料費の高騰が加わります。勿論、温暖化による干ばつや豪雨による自然の脅威は、想定を超え続けています。これだけでも絶望的な気持ちになってしまうのですが、今回ご紹介するのは、種子の現状です。実に、農業の根幹ともいべき種子までも輸入に頼っているのがこの国の現状です。

現在、日本の食料自給率は、令和2年度のデータによると、カロリーベースでは37%、生産額ベースでは67%となっています。農林水産省の食料自給率によると「野菜」は80%となっていますが、これはあくまでも日本国内で栽培したというだけであり、種子から肥料等に至るまで全て国産である野菜は10%にも満たないのが実態です。なぜなら、野菜のタネは90%以上を海外から輸入しているからです。

現在、市場に流通しているタネのほとんどは、種苗メーカーが生産したもので、その生産は海外で行われています。意外かも知れませんが、野菜のタネは、できた野菜から採るといった形をとっていません。現在出回っている野菜の種は「F1種」といって、複数の種を掛け合わせで、良いところ取りして交配させた雑種です。種苗メーカーは時間をかけて研究して、この掛け合わせの組み合わせの良いものを探して開発します。F1種は、良いところ取りの品種で、発芽率も良いし、収穫量も見込めます。大きさ、形も規格に合った野菜ができます。生産者にも販売者にも消費者にも都合が良いタネなのです。F1種がなかったら、戦後の高度成長期の日本の食卓が、こんなに豊かにはならなかったとすらいわれています。では、タネはどこから輸入しているかというと、そのほとんどは中国からです。ですから、台湾有事やシーレーン封鎖などという事態になってタネの輸入が止まってしまったら、この国の野菜作りは壊滅的です。では、輸入でなく国内でタネを生産すればよいではないかと考えたくなりますが、日本の気候は温暖で湿度が高く、病気が出やすいため、高品質のタネを生産するには適していないとのこと。それに、種作りのハウツーは、海外にいつてしまいました。しかし、高度経済成長期前は、各農家が自前でタネをとっていたわけです。農業の合理化が図られる中、種作りも育苗も分業化され、それぞれに研究が進み専門的になりました。その技術を活かしつつ、種からしっかり国内で完結できる食料の供給体制をつくるのが急務のようです。